

佐伯祐三 ー自画像としての風景

東京ステーションギャラリー 23.01.21～04.02

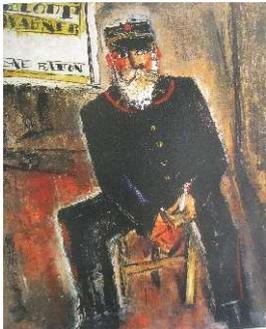
大阪中之島美術館 23.04.15～06.25

「佐伯祐三」(1898～1928)は、街に生き街に死す描くことに命を捧げた伝説の画家で、本年は生誕125年を迎え生涯は多くのドラマと伝説に彩られている。

画伯の作品は、パリの街角や店先などを独特の荒々しいタッチで描いたものが多く、風景画にはモチーフとして文字が描かれるものが多く、街角のポスターや看板などの文字を造形要素の一部としていることが大きな特色である。

画伯にとっては、パリは特別な街であり、重厚な石造りの街並み、ポスターが貼られた建物の壁、プラタナスの並木道、小さなカフェ、教会、さらに公衆便所までが、傑作を生み出す作品の契機となったとされている。

本展は、15年ぶりになる大回顧展で、絵画を作成した「パリ」、生誕の地「大阪」学生時代の「東京」の3つの街での活躍の足跡を追いながら、独創的な佐伯芸術が生成する過程を「約140点」の作品で検証している。



佐伯祐三 《郵便配達夫》 1928年 油彩/カンヴァス

画伯が最晩期の30歳に描いた作品は、硬直した姿勢、見開いた目、朱赤に染まった耳は、まるで「くるみ割りの人形」のような男性の肖像画である。

赤い徽章のついた制帽を目深くかぶり、ピンとはねる長い口髭、豊かな頬・顎鬚に半ば隠れた顔で、やや右側の傾いた姿勢でこちらを直視している。

佐伯祐三 《ガス灯と広告》 1927年 油彩/カンヴァス

2回目の渡仏期の代表作の一つとされ、画伯の代名詞と言えるポスター等の文字で埋め尽くされた作品は、くすんだ石壁の質感表現と幾重にも貼られた広告ビラの多彩な色班やその上を走る鋭い筆線が幻想的である。

佐伯祐三 《テラスの広告》 1927年 油彩/カンヴァス

ホテル・レストランのテラス席を描いた作品で、カフェを描いた作品の黒い文字は、画面に動きを与える要素として重要な役割を果たし、白い壁に広告の赤と緑の組み合わせが全体に温かみを感じられる。